

令和6年度 学校評価表(最終)

三原市立大和小学校(校番20)

a 学校教育目標	夢や目標に向かって、自ら伸びる とともに伸びる児童の育成 (校訓) 自ら伸びる とともに伸びる	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】 志を抱き、その実現に向けて考え、行動できる未来の創り手の育成 【ビジョン】 児童、教職員、保護者が「夢や目標に向かって、自ら伸びる とともに伸びる」という教育風土がある学校 <めざす学校像> 「自ら伸びる とともに伸びる」という教育風土のある学校 <めざす子供像> 「規律あるかわり合いを通して、自ら考えともに伸びようとする子供」 <めざす教職員像> 「児童を守り、育て、育む」ことを自覚し、実践できる教職員
----------	--	----------------------	--

評価計画					自己評価					改善方針		学校関係者			
c 中期経営目標	d 短期目標	e目標達成のための具体的方策(大枠)	f 評価項目	指標	令和6年2月	目標値	10月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n	l 評価	m	
					h 達成値(参考)		h 達成値	h 達成値				改善方針	イ ロ ハ	コメント	
確かな学力	【授業改善による学力定着】	・児童の主体的な学びにつながる「問い」「学び合い」のある授業づくり【研究部】 ・45分間の授業で、R80を活用した「振り返り」から逆算した「めあて」を設定した「わかる、できる」授業づくり ・学び方の選択肢と自己決定のある授業づくり【研究部】 ・「聞く」ことを大切にし、ねらいを達成するための「学び合い(ペアやグループによる学習)」のある授業づくり【研究部】 ・教科書の文章を「読む」ことができる授業づくり【研究部】 ・教材文等のことばに根拠を求める授業づくり【研究部】 ・学習規律の徹底し、親和性のある学習集団づくり【研究部】【生徒指導部】 ・ねらいを達成するために、ICT機器等を活用した授業づくり【研究部】 ・実生活や実社会の課題を解決するプロジェクト型学習の充実【教務部】	単元末テスト(国語、算数、社会、理科)の学年平均値が指標に示す点を超える教科数(20教科) 【評価時期】(1学期末・2学期末) NRT学力テストの平均値が全国平均以上の教科数(13教科) 【評価時期】(7月) 校内図検定(自作テスト)の平均正答率 【評価時期】(10月) HyperQU学習環境分析の「学習意欲」 【評価時期】(5月 10月) ○教職員のアンケートによる調査 ・学習者が目的意識を持つことができるような発問であるか。 ・学習者が学びのゴール(何がどのようにできればよいのか)を意識できるような工夫があるか。 ・学習者が新たな意味やアイデアを伝え合えるような対話の場を設定しているか。 ・学習者が知識、経験、見方、考え方を生かしながら学べる計画になっているか。 ・学習者が自身の成長や課題に気付けるような工夫があるか。 ・児童から引き出したい学びの姿を明確にして、発問を構成したか。 【評価時期】(1学期末・2学期末)	平均値 1・2年生(90点) 3・4年生(85点) 5・6年生(80点) 全国平均以上の教科数 各学年の平均正答率80%以上 全学年全校平均以上	15／20教科 5／13教科 — 2学年	20／20教科 13／13教科 100% 6学年	15/20教科(75%) 2/13教科(15%) 5/6学年(83%) 4学年(74%)	20/20教科(100%) 2/13教科(15%) 6/6学年(100%) 4学年(74%)	78.8%	C	・全教科の平均点が、目標値を超えることができた。しかし、1学期と比べて平均点が下がった教科が6教科であった。 ・図検定の結果は、1学期の平均点が79点だったのに対して、2学期の平均点は94.5点であった。 ・学習意欲は、2学年が全国平均を下回ってはいるものの、1学期と比べると、9.4→9.6 8.8→9.2と、どちらの学年も上昇している。 ・教職員アンケートの結果は、目標を超えた。教育研究会があり、じっくり教材研究を進めて授業が展開できたのではないかと考える。	・主体的な学びを目指して、児童自身が「予想からのズレ」「既習事項からのズレ」「友達のかえとのズレ」などから「問い」をもてるように、指導者が「問い」を工夫する。 ・論理的に思考する力が身に付くようにするとともに、ともに学ぶ姿勢を伸ばすようにするため、「〇〇さんの言いたいことって何だろう」「〇〇さんの続きを話してみよう」などの「問い」を児童に投げかけ、児童の意見を取り入れた話し合いを工夫する。 ・学年末に向けて、学び直しを行い、当該学年での学びをきちんと定着させる。 ・45分間の授業で、R80を活用した「振り返り」から逆算した「めあて」を設定した「わかる、できる」授業づくりを重ね、意欲的に学べるようにする。	○	・先生方が同じ方向で目標を達成するために取組を進めている様子を感じた。組織的に学力向上を図っていくとされていることがよく分かった。 ・図検定の平均点が上がっているのは先生方の取組の成果だと思う。 ・多忙中、教材研究をされ、わかる、できる授業づくりに努めておられるので児童が主体的に学ぼうとする姿に繋がっている。 ・落ち着いて学習することができるので少しずつ成果がでてきている。継続した取組が大事だと感じた。 ・全教科の平均点が目標値を超えているのは素晴らしい。特に学習意欲が伸びているのは、教材研究の深さと個に応じた対応をされている成果だと思う。	
															その学年で身に付けるべき学力を確実に定着させる
豊かな心と親和性の高い集団	【規範意識の育成】	児童に所属意識を持たせ、円滑な集団生活の基盤となる(規範意識・ルール・マナー等)を身に付けさせる ・「大和小みんなの一日」、学習規律チェック表に基づく積極的な生徒指導を日常的に実施【生徒指導部】 ・生活や学習の場で自己決定する場の設定【生徒指導部】【研究部】 【共感的な人間関係づくり】 児童に、他者とかかわり合う場面を与え、その中で、自己肯定感を高めさせるとともに、相手に尊重することと態度を身に付けさせる	HyperQU「学級生活満足群」に位置づく児童の割合60%以上の学級数 全ての児童に学びの場がある。	学級生活満足群に位置づく児童の割合60%以上の学級数 所属学級、SSR、市ふれあい教室、フリースクール、リモート授業、保健室などの学びの場	4／8学級 —	8／8学級 100%	5／9学級 100%	6/9学級 100%	44%	D	・学級生活満足群に位置づく児童の割合60%以上の学級数は前回よりも増えているが目標には達していない。1年、2年、あおぞら3組が目標に達していないが、1年は1学期27%であったのに対して2学期は57%になっている。 ・不登校児童及び不登校傾向の児童はいるが、全ての児童が、所属学級、SSR、保健室、市ふれあい教室、リモート授業など、それぞれが学ぶ場を選択することができている。 ・児童質問紙は、目標を達成したのは2項目である。目標は達成していないが、前回から上がった項目は4項目中3項目であった。特に、「学校のきまりやルールを守って生活している」については、98%であるが、「注意は1回で聞く」ことを指導し、できている場面を肯定的に捉えて放送で周知したり、道具の使い方等気になることがある場合は児童会が毎日放送で呼び掛けたりと、粘り強く言い続けた成果であると考えられる。 ・いじめ事案は現時点で5件認定した。いずれも、随時のいじめ防止委員会で、対応方法を検討して児童、保護者、学級の児童等に説明や指導をしている。その後も3か月、いじめ防止委員会や教職員の連絡会で取り上げることで事後の様子を把握できるようにしている。	・各学級で、特別活動の充実に取り組み、自己肯定感や自己有用感を高めていく。 ・仲良し班遊びや全校集会等、集団活動を取り入れて、児童の関係づくりや楽しい場づくりをしていく。 ・支援が必要な児童については、スクールカウンセラーや福祉や医療等の関係機関とつながることができるようになっていく。 ・今後も、月2回の不登校支援会議で、状況把握や目標や対応の検討を行う。 ・今後も、生徒指導委員会、生徒指導上の課題や問題行動が多い児童の様子について対応方法等を話し合い、連絡会で周知することで、全職員が同じ指導ができるようになっていく。 ・今後も、定期的ないじめ防止委員会では、いじめにつながりそうな事案を早期に把握すること、事案発生時には随時のいじめ防止委員会を行って対応方法等を検討すること等、組織的に対応していく。	○	・児童が安心して登校することや学ぶためにSSR等様々な場所で学習できる環境づくりをされていることが、全体の欠席日数減少に繋がっていると思う。 ・高学年の自主的・主体的な学校安全のための行動が、他の学年に良い影響を与えている。児童同士で自然と助け合う姿がもって定着できたよと思った。 ・将来の夢や目標を持っている児童が多く、素晴らしいと思った。 ・学校全体で、同じ方向で取り組んでいることが、児童の満足度や問題行動の減少に繋がっていると思う。これからも期待しています。	
															児童質問紙によるアンケート調査(あ)「学校のきまりやルールを守って生活をしている」 (い)「自分にはよいところがある」 (う)「自分のよさを周りの人に認められていると思う」 (え)「将来の夢や目標を持っています」 (お)「努力すれば、自分もたいていのことは出来ると思える」 (か)「困ったことがあったとき、先生や友だちに相談できる」 【評価時期】(1学期末・2学期末) いじめ事案やいじめにつながる事案を把握し、児童と保護者、学級の児童に対応する。
健やかな体	【生涯にわたって健康づくりをしよとする健康教育の充実】 【生涯にわたって運動しようとする心身の育成につながる授業改善】	・生活リズムを整える取組の実施(園小中連携教育)【保健安全部】 ・楽しく、運動量がある体育科の授業改善【保健安全部】 ・自分の目標に向かって挑戦することができる体育科等の授業改善【保健安全部】 ・児童同士が「見る」ことを大切に体育科の授業改善【保健安全部】 ・自己決定の場がある体育科の授業改善【研究部】【保健安全部】	児童質問紙よりアンケートによる調査「体育の授業は楽しい」 「おうちで決めた時刻に寝ている。」 【評価時期】(1学期末・2学期末)	児童質問紙よりアンケートによる調査「体育の授業は楽しい」 「おうちで決めた時刻に寝ている。」 【評価時期】(1学期末・2学期末)	肯定的評価の割合	「体育の授業」71% 「早寝」70%	「体育の授業」95% 「早寝」80%	「体育の授業」89% 「早寝」71%	「体育の授業」89% 「早寝」70%	80%	B	・「体育の授業が楽しい」と感じている児童の割合は変わらなかったが、目標値は達成できなかった。 ・「おうちで決めた時刻に寝ている」(早寝)ことができている児童の割合も70%で、目標値は達成できなかった。 ・こども園や中学校とともに取り組んでいる「基本的な生活習慣確立のためのアンケート」を児童と保護者に実施したが、休日におけるアウトメディアの数値が低く、早寝が難しかったのではないかと考える。	・運動が苦手である児童が、楽しく運動量がある授業を推進していくため、自己決定や自己選択の場を設定した授業改善を行っていく。 ・R80において、自分のがんばりやできたことを評価したり、共有したりする場を設定していく。 ・ICT機器を活用し、自分や友達の動きを見ることが、進んで動きを工夫することができた。今後もICT機器を活用し、楽しく運動量がある授業づくりを推進していく。 ・アンケートの実施により、「早寝」や「就寝1時間前のアウトメディア」に取り組むきっかけ作りはできているものの、「早寝」には課題がある。今後こども園や中学校と連携を図ったり、計画的に保健指導を実施したりしながら取り組みを継続していく。	○	・運動ができる児童はもちろん、苦手な児童にも技や動き方のポイントが明確に示されていて、子供同士が教えあいがら活動していることが素晴らしいと思った。 ・これからも体を動かすことの楽しさを持ち続けさせる取組をお願いします。 ・アウトメディアや早寝は、やはり家庭でしっかりと取り組んでもらいたですが、親世代もなかなか難しいのではないと思う。
働き方改革	教育課題に適切に対応する学校体制を再構築するとともに、学校行事及び総合的な学習の時間の内容を精選することを通して、児童に向き合う時間数を確保するとともに、職員の健康を維持する。	教育課題に適切に対応する学校体制を再構築するとともに、学校行事及び総合的な学習の時間の内容を精選することを通して、児童に向き合う時間数を確保するとともに、職員の健康を維持する。 ・各部が担当する行事を精選する。 ・関係機関・団体と連携する取組について、学校が担う業務を軽減する。 ・定時退校を実現する。 ・見通しを持った業務を行う。	○市の方針「勤務時間上限の目安時間」上限の目安時間及び特例的な扱い」に記載されている内容を達成する。 ・上層目安時間・45時間/月を超えない。・360時間/年を超えない。 ・特例的な扱い・720時間/年を超えない。・45時間/月を超える月は、1年間に6月まで、連続する複数月のそれの期間について、1ヵ月当たりの平均が80時間を超えない。 【評価時期】(9月末・1月末)	勤務時間外の有在校時間 全教職員年間360時間以内、月45時間以内の割合	39%	100%	38%	47%	47%	D	・全職員が、時間外在校等時間を毎月45時間以下の目標は達成できていない。しかし、目標値に近づいている職員は増えている。特例的な扱いに関する目標は達成できている。また、昨年度に比べて、全教職員(16名)の総在校時間は減少している。 ・学期はじめの月は、時間外在校等時間がのびる傾向がある。	・見通しを持った業務が遂行できるように、引き続き、行事予定、報告業務等の早めの周知を行う。 ・長期休業中に、次の学期に向けた準備(授業準備、学級事務、分掌事務等)を効率的に行えるように意図的な研修時間を設ける。 ・学期はじめ月は、月を通して事務作業ができる時間を確保していく。 ・児童の下校時刻が早い日の中で、定時退校日を設定し、心身ともに回復できる時間を確保していく。	○	・様々な対応がある中で、学校全体で協力あって時間を確保されていることを評価する。 ・学校全体の取組が昨年に比べて時間外在校時間減少に繋がっているのだと思います。大きな成果だと思う。 ・時間を削減する策がなかなかなく、働き甲斐という視点からも考えていきたいと思う。	
															勤務時間外の有在校時間 全教職員年間360時間以内、月45時間以内の割合

研究	主体的に学び、自ら伸び とともに伸びようとする児童の育成 ～「自己決定の場」と「問いの工夫」がある授業づくり～	連携教育	園・小・中連携教育で伸びる「大和っ子」の育成	【自己評価 評価】 A:100点(目標達成) C:60点(もう少し)・80点(できていない)・60点 B:80点(ほぼ達成)・100点 D:できていない・60点	I:自己評価は適正である。 ロ:自己評価は適正でない。 ハ:分からない。
----	--	------	------------------------	--	--